

### 【責任】

現在は商学部商学科に所属し、経済学(産業組織論、経済政策)を中心に教育・研究活動を行っている。自分にとって大学教員としての主たる責任は、経済学という学問の教育を通じて、以下の項目にある教育理念を実現することである。

ここ数年の担当科目としては、学部専門科目としての経済学関連科目(経済学、マクロ経済学、ミクロ経済学、経済政策)、複数の演習系科目を担当した。経済学関連科目に関しては講義形式、演習科目については履修人数に応じて課題の提供、学生の教育支援等を行った。教育行政においては学術・地域連携専門部会、国際交流専門部会に所属し、学生生活の支援を行った。

### 【理念】

教育者として、ただ自分の頭の中にある既存の経済学の知識を言葉として学生に説明するだけでなく、学生とともに今自分の中にある経済学の知識、あるいは対峙する学生の持つ感受性豊かな知識とともに学びあうことで洗練し、一つの“考え方”として昇華させ、皆で様々な現在進行形の様々な社会的課題を考えられるようになる、そのための“考え方”を提供できるよう、常に成長できるような教育・研究者でありたい、と考えている。具体的には以下の通りである。

まず、これまで何度か記したが現在進行形の様々な社会・経済問題を“広く”認識してもらう、特に一見経済とは関係ないような社会問題も経済活動に大きく関わることが往々にしてあるのだ、ということを知ってもらいたいと強く思っている。そのための効果的な工夫は自分にとっての理想の教育者に近づくための課題の一つと考える。

次に、単に世の中の様々な社会・経済問題を表面的に捉えることに終始するのではなく、その真理たる経済メカニズムについても一定程度理解を深め、経済学の“考え方”を習得してもらいたい。ともすれば本学のようなビジネスマンになる卒業生が大半の学校において、いわゆる経済理論の教育は必要ない、という声も聞こえてくるが、物事を客観的に見て、自ら“考え”、選択することが出来るようになる能力は、研究に携わるもののみならず、より質の高いビジネスマンとなるための条件である。この力がなければ、前段で述べた広く知識を得たところでそれを自由自在に社会の中で活用することが出来ず、ビジネスマンとしても中途半端な存在となってしまう。経済学というのは数ある学問の一つであるが、その経済学の“考え方”を理解できていれば一つの武器を持つことに他ならず、必ず社会の重要な一員となりうる。したがって、学生が経済学の“道理”に上手に近づけるように工夫すること(これは決して優しく噛みくだいて説明するだけがその方法ではなく、学生自身が自ら見つけ出すよう導くこともその方法の一つと考える)も自分が理想とする教育者像に一歩近づくための課題である。

最後に、学生には様々な経済活動に対して恐れず興味を持ち、自ら考えて、自分なりの考え方をもって積極的に主張し、他の人と議論を交わしてもらいたい。上段二つの教育課題は、この最後の課題を学生のうちに数多く経験してもらい、社会に出たときの武器をしてもらいたいのが故に課しているもので、経済問題その他について自分の考えをもって仲間、大人と有益な議論を交わすことが、学生に大学において学問を通じて最も経験してほしいことである。教育者としての

自分は、上段二つの課題を学生が克服できるように、また最後の課題を数多く経験させられるようにいかに支援できるか、が最大の教育的課題と考えている。学生から、この三つのことを経験した後、「楽しかった」、「よい経験が出来た」、あるいは「悔しかった」などの言葉を聞けるようになったとき、社会科学の学問分野の一つである経済学の教育に携わりながら、初めて理想の教育者像に近づけるはずである。

#### 【方針・方法】

上記理念の実現をめざし、特に講義の順番、スピードに注意をして教育計画を立てることをこころがけている。

「経済(活動)」を知る；まずは、講義の中で様々な事例を紹介して現在進行形の経済・社会問題に興味を持つ動機付けをする。なお、「商学部」で「経済学」を学ぶ意味、については機会があるごとに説明している。

「経済メカニズムを理解する」；その上で、経済・社会問題を理解するために必要な経済学の考え方について説明する。この際、なるべく受講者の理解の度合いを直接会話するなどの方法で情報収集し、柔軟に説明の方法を変更する。本学では比較的語句簡単な数値例を使うことで相関関係、因果関係の理解が進む傾向があるので、効果的に用いている。

・どうしても講義部門では集中力を欠くことも多いこと、一方で理解の早い人には書きながら頭の中で考えてもらいたいことなどの理由から、板書を多く用いている。特に経済学の説明でよく用いられるグラフなどは、実際に自分で書いてみることで理解の端緒となる。

なお、ノートの取り方については1年次のはじめの講義で必ず説明している。

「経済問題」について自ら考える；来年度から本格稼働するゼミについては、特に今年度は初年次中心の授業である「経済学」の履修者から、A+という最高評価を得た学生が4人も自らのゼミを選択してくれたことは経済学教育において大変自信となった。そこで今後1～3年においては、今年度ゼミに加入した彼らをいかにして社会のなかで“自分からアクションを起こし、選択を行うことの出来る人”にするべくその基礎付けが出来るか、が自らの最大の課題である、と考える。そのためには、彼らにより深く経済学という学問に興味を持ってもらうような動機付けをしながらゼミを進めていくことが一般の講義以上に重要であり、課題、テーマの選択等で、ゼミ生の考えに寄り添っていく、ともに学んでいく姿勢をこれまで以上に重視したい。

#### 【評価・成果】

・これまで講義が教育活動の主なので、学生からの授業評価の結果が評価に当たるが、賛否両論あったことは否めない。特に上段で述べた板書に関する評価が真っ二つに割れている。ただし、熱心さについては比較的高い評価を得ている。口頭ではあるが、授業を履修し終わった後、特に卒業生などから「先生の授業が最もわかりやすかった、おもしろかった」とのコメントをもらうことも多く、全体的に担当する上級の授業を継続して履修してくれる学生の割合が多い。

#### 【目標・アクションプラン】

- ・ゼミに関して、他校との対抗討論会に継続的に参加できるようにする。(2020年～)
- ・学内にも討論会といわずとも、ゼミの成果発表会などを開催できるよう働きかけていく。
- ・経済学のみならず、本学を卒業する学生が学問的武器を持ち、社会で活躍できるビジネスマンとなれる人材が増えるよう意識して教育の一端を担う。